
織り姫になりたい

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織り姫になりたい

【Zコード】

Z5635E

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

『七夕小説企画星に願いを』に参加した作品です。～あらすじ～
最近私の周りにいる大好きな人達が私に冷たいの。どうしてなのか
な……。

あれは、夏祭りの帰り道だったかな。私はお父さんと、お母さんと一緒に、手をつないで土手を歩いていた。そのとき、お父さんが星を見ていた。小さな私の手をひいて、川原におりていったんだ。

ズボンが汚れるのも構わずに、私とお父さんは並んで川原に座つた。最初は汚れるからって泣つてたけど、お母さんも結局私の隣に座つた。

川原には夜空を遮るものは何もない。雲のほとんどない夜空には、たくさんの星が瞬いていた。

お父さんの言つ通り、きらきらと輝く星がとても綺麗で、胸がどきどきしたのを今でもよく憶えてる。

お父さんは夜空を指差して、私に教えてくれた。

「ほら、織恵。見て」」覧。あれが天の川だよ」

お父さんの指差す方を見ると、ぼうっと明るい白い流れが見えた。初めて天の川を見られた事が嬉しくて、私はお父さんに尋ねた。

「じゃあ、織姫様はそこに住んでるの？」

お父さんはそんな私に笑つて、頭の上に際立つて明るく光る星を示した。今では知ってる。その星はこと座のベガつていう星だつて。

「あれが、織姫様だよ。普段はお星様なんだ」

「ふーん。じゃあ織恵、お星様になるのかな？」

そう言つた私に、お父さんとお母さんは顔を見合わせて笑つた。

「なんでそんな風に思うんだい？」

「織恵はまだまだ、お星様になんかならないわよ」

やう言つて笑つお母さん。私は何だか恥ずかしくなつて、唇を尖らせた。

「だつて、織恵は織姫様の名前をもひつたんでしょう。ねえ。お父さん」

お父さんは微笑んで頷いた。

「やうだよ。七月七日に生まれたから織恵。織姫様のよひに、美しく愛される子になりますようにって、お父さんがつけたんだよ」

そう言つて笑顔で私の頭をなでてくれたお父さん。お母さんも微

笑んでいる。幸せそうな笑顔。

あの頃は本当に幸せだった。

でも、今は……。

笑顔なんて見る事ができない。

お父さん、お母さん。

ねえ。

今でも私を、愛してる?

2

昨日とはひつて変わつてよく晴れたから、塾の帰り、私は寄り道をすることにした。

塾は私の家から川を挟んだ向こう側にあるから、いつもこの川沿いの道を歩いている。

私は橋を渡る手前で足を止めて、土手に座った。星を眺めようと思つたんだ。小さい頃ここで、お父さんとお母さんと一緒に星を見てから、ここが私のお気に入りの場所になつた。

クマさん柄の腕時計をみると、夜の八時になつていた。この時間になると、この辺りはぐつと人通りが少なくなる。ぽつぽつとある街灯のお蔭で真っ暗になる事は無いけれど、なんだかとても寂しい風景。

下を流れる大きな川は、雨の川と書いて『あまのがわ』と読む。その雨川は昨日の雨のせいで、いつもよりも水かさが増している。暗くてよく見えないけれど、流れも心なしか速いみたい。

3

私は川から視線をはずして、夜空を見上げる。ああ、やっぱり見えた。こと座のベガ。私の名前と同じ織姫とも呼ばれる星が、私は大好きだった。

七夕のお話も好き。小さい頃、何度も繰り返し読んだ、絵本の七夕天女。

彦星は天の羽衣を盗んで、それを隠して織姫と結婚しちゃう。でも、結局隠してた天の羽衣を織姫に見つかって、織姫は天に帰っちゃう。当然だよね。騙してたんだもん彦星。

でも、最近思うんだ。わらじを千編めば、天に帰った織姫に逢う事ができると聞いて、千のわらじを編んだ彦星がかっこいいなつて。だつて、千つて凄い数だよ。それだけ、織姫に逢いたかったんだよね。彦星は。

いいなあ。そんな風に愛されてみたいなつて思うんだ。

「おーい。星野。またここにいる。おばさんに怒られるぞ。夜に一人でこんな所にいると危ねえつて」

聞き覚えのある声が土手の上から聞こえて、私は振り返った。逆光になつて、顔は良く見えなかつたけど、その声とシリエットには見覚えがあつた。

「じゃあ、和君も一緒に星見る?」

そう言つと、不機嫌な声で答えがあつた。

「バー力。誰がおまえなんかと見るか」

そつけない答え。つまらないの。私は立ち上がり、スカートのお尻の部分を叩いた。

スカートについた土をあらかた落としてから土手にあがると、和君が両手をズボンのポケットに入れた格好で、私を待つていた。物凄い仏頂面だ。せっかくカッコいいのだから、そんな顔しないでほしい。

学校で友達といふ時はそんな顔しないくせに。最近私といふ時はいつも怒つたような顔をして、余り目を合わせてくれない。和君は私服姿で、肩から鞄を斜めにかけていた。ということは、

塾帰りだ。私と同じ塾に通つてゐるのに、私より「」を通るのが遅いのは、たいてい和君が寄り道をしてるからだ。

いつもの如く友達とコンビニでも行つてたんだろうな。

私と同じ中学一年生の天川和彦君は、私の家のお隣さん。つまり幼馴染。

幼稚園の頃は、結婚の約束までした仲だったのに、最近本当に冷たいんだ。

学校では絶対に話しかけてこないし、私が話しかけてもたいてい無視されちゃう。学校の友達がいないところでなら、いつも話しかけてくれたりするんだけどね。

名前だって、前は織恵ちゃんって呼んでくれてたのに、最近は星野って呼ぶようになつた。私にも和君じゃなくて、天川君って呼べつて言つのよ。それが何だか寂しい、今日この頃。

「何ぼつとしてんだよ。帰るぞ」

不機嫌な声でそう言われて、私は和君の数歩後を歩く。時折、生暖かい風が通り抜けていく。川原に生えた草木の葉擦れの音が耳に届いた。風がやんだ。昼間と違つて、夜の道は静かだつた。

しばらく無言で歩いていたけど、昼間なら聞き逃すような、和君の小さな声が私の耳を打つた。

「今日も一人なのか？」

こちらを振り向きもせず、抑揚のない声で言われた言葉に、私は見えないと分かつていたけど頷いた。

「うん。途中で」「飯買つて帰らなきゃ」

「ウチ来れば？」

何買つて帰るの？なんて考えよつとした時に言われたので、私は驚いた。

「いいの？ 迷惑じゃない？」

そう言つと、和君は立ち止まって私を振り返つた。その顔はやっぱり仮面だ。

「しょうがねえだろ。母さんがたまにはおまえを飯に誘えつてうるせーんだよ。俺は別におまえに来てほしいとか思つてねえけど。俺は女となんか一緒に飯食いたくねえし。けど、しょうがねえだろ」

和君はしょうがねえを繰り返していた。何だかそれがいい訳の様に聞こえてくるから不思議。ねえ、和君。本当はそんな風に思つてないんでしょう？ そう聞けたらいいんだけど、そんなこと言つたら絶対怒るし。

でも、心底嫌がつてるわけじゃない。それが分かるから、何だか嬉しくなつた。

「ねえ、和君。手、つないで帰ろうよ」

そう言つて手を差し出したら、物凄く嫌な顔をされた。酷い。「はあ？ バカなこと言つてんじやねえよ。誰がつなぐかそんなもん。人に見られたらどうすんだよ」

その言葉に、私は反論する。

「でも、昔は良く手をつないで帰つたじゃない。前はそんなこと言わなかつたのに、最近冷たい。和君」「つるせえ。和君つて呼ぶなつて言つてんだろう。さつさと行くぞ、星野」

怒つたように私に背を向けると、足早に歩いていつてしまつ。私は慌てて和君の背を追つた。

どうして、みんな私から離れていつてしまつのだらう。そんなことを思いながら。

3

和君の家でお夕飯を「」駆走になつてから、私は家に帰つた。

和君のお母さんは和君に似て明るくて元気な人で、とてもにぎやかな食卓だった。和君のお姉ちゃんの成美ちゃんとも、久しぶりにたくさんお話できだし。とても満足。

私は楽しい気分で玄関のドアを開けた。

その時、居間の方からお母さんの怒鳴り声が聞こえてきた。楽しい気分が一気に冷める。

またやっている。

私はそう思って、眉を顰めた。

最近、お父さんとお母さんは顔を合わせるたびに喧嘩している。いつから、どんな理由で喧嘩しているのかは、よく分からないけど。最近私はお父さんとお母さんの笑顔を見ていない。

一人とも共働きだから、家にいる時間も少ないし。今日みたいに、私が起きている時間に帰ってくることも少ない。

せっかく、家族が顔をあわせることのできる貴重な時間なのに、どうしてお父さんとお母さんはいつも決まって喧嘩をするのかな。私には理解できない。

理解したくない。

だから、私は耳を塞いで、手も洗わずに部屋へ向かった。

部屋に入つて鍵を閉め、ベッドにもぐりこんだ。それでも微かにお父さん達が怒鳴りあつてている声が聞こえてくる。私は布団を頭から被る。

聞きたくない。聞きたくない。聞きたくない。喧嘩している声なんて聞きたくない。

心の中で、やめてやめてと言っていた。二つの間にか眠りに落ちていた。

朝起きたら、家には誰もいなかつた。もう仕事に行っちゃったんだ。そう思つたら溜息がでた。買い置きしておいたコーンフレークのチョコレート味を、箱から器に出して、牛乳をかける。これが今日の朝食だ。いただきますと一応挨拶して、スプーンを持ち上げた時、テーブルの上に置手紙があることに気づいた。

その紙を取つて、文字を目で追う。

『話しがあるから、今日は早く帰ってきなさい。父、母より』

私は、コーンフレークをスプーンでかき混ぜながら、首を傾げた。珍しい。最近まともに顔をあわせてもないのに。話してなんだろう。そう思つて気づいた。もしかしたら、お父さんとお母さんは忘れていなかつたのかもしれない。

今日が、私の誕生日だつてことを。

今日はとてもよい日になりそうだ。

そう思つてた。

朝、学校行つたら、友達のよりぢゃんと、ルミちゃんに誕生日プレゼントをもらつたし。

とつても可愛いウサギのぬいぐるみ。頭が大きすぎてぐらぐらする一頭身のぬいぐるみだつた。以前一緒に買い物に行つたとき、私が欲しこつて言つたのを覚えててくれたみたい。

とつても嬉しい。とつても嬉しかつたのに、放課後その嬉しさがすっかり吹き飛んでしまう出来事があつた。

校門を出ですぐに、教室に忘れ物をしたことに気づいた。だから私は、よりぢゃんと、ルミちゃんにバイバイして、教室に一人引き返したんだ。

あの時、忘れ物したことに気づかなければ、あんな場面に出くわす事もなかつたのに。

そう思つても、その時の私は教室に向かつた。

教室の前まで来てドアを開けようとした時に、クラスメートの男子数名が教室で何かを話しているのが聞えてきた。

私は一瞬ためらつた。だつて、五六人の男子がいる中に入つてくるのつて、ちょっと勇気がいる。

それでも意を決して、ドアに手をかけたとき、男子達の会話の中で、私の名前が上がつたのが聞えてきた。

「カズー。おまえと星野つて付き合つてんの？」

和君が中に入っているんだ。

どうしよう。やっぱり入れない。

でも、この場を後にする事もできない。和君がなんて答えるかが気になつて、私はその場で耳を澄ました。

「ふざけんなよ。なんで俺が星野と」

否定する和君の声。私は溜息をつきそうになつて慌てて口を押さえる。誰かに聞えたら大変だ。立ち聞きしている事がばれないいうちにここから立ち去ろう。

そう思つた時だつた。また、和君とは別の声がこう言つた。

「でも、星野と仲いいじゃん。おまえ、しちゅう星野に声かけられてるし」

「本当は好きなんじやないの？　いいじゃん。否定しなくてもさ。

星野結構ランク高いじゃん」

和君をからかうような声がいくつも上がつた。次第に大きくなるからかいの声を遮るように、大きな音がなつた。きっと和君が机を叩いたんだ。

「うるせえ。俺は、星野なんて嫌いだよ。大嫌いだ。何がランク高いだ。目悪いんじゃねえの」

和君の怒鳴る声が、廊下まで響いた。

「あいつが勝手に話し掛けてくんだよ。馴れ馴れしいつつの。俺は迷惑してんだよ」

そう言つ声がこちらに近づいてくる。

どうしよう。今すぐ立ち去りたいのに、足が動かない。

ガラリと、ドアが開いた。

ドアを開いた人物は、私がいたことに驚いた顔をして立ち止まつた。

「星野……」

私はその人物の顔を見上げた。

ほら、やつぱり和君だ。

和君の驚いたような顔が、ゆがんで見えた。びくびくよつ。泣き声。泣いちゃだめ。泣いたら和君を困らせやうやう。そんな想ひのこ、元のひびきが目の中につく。

私は下を向いた。一粒の涙が床に落ちた。

「忘れ物、取りにきたんだけど。もうこいや。「めんね、和君。もう、話しかけたりしないから」

震える声でそう言つて、私は和君に背を向け駆け出した。後から和君が私の名前を呼んだような気がしたけど、きっと氣のせいだ。だって、和君は私が嫌いなんだもん。

嫌われてたなんて知らなかつた。だって、和君は幼馴染だし、幼稚園の時は私のこと好きだつて言つてくれたし。だから、最近そつけなくなつても、嫌われてるわけじゃないと思つてた。

そんなはずないつて、思い込んでただけだったのかな。
後から後から流れる涙。

いつからだろ?。いつから嫌われてたんだろう?。言つてくれなきや分かんない。分かんないよ、和君。

涙は中々止まらない。でも、家に帰る前に泣き止まなきや。お父さんとお母さんがきつと、家で待つてゐるから。

川原に座つて、涙が止まるのを待つていたら、辺りは夕焼けになつていた。私ははれぼつた目を気にしながら、家へ帰つた。帰りの途中。色んなお家の庭に笹が飾つてあることに気がついた。そういうえば笹なんて最近用意してないなつて思つ。

小さい頃はお父さんとお母さんと三人で、折り紙で貝殻を作つたり、ちようちゃんを作つたりして、笹を飾つてた。短冊にお願い「」とを書くのも樂しみだつたのに。そんなことするの、忘れてたな……。

「ただいま」

玄関のドアを開けると、お父さんとお母さんの靴が並んで置いて

あるのが目に入った。本当に帰ってるんだ。

少しだけ嬉しくなつて、私はお父さんたちがいるはずの、居間のドアを開けた。今日早く帰つてくれたのは、私の誕生日を覚えててくれたから。そう思つていのつかな。

「お帰り、織恵」

お父さんとお母さんが並んで、ダイニングテーブルの席についていた。

お父さんたちの表情を見て、私は笑顔を崩した。お父さんたちの顔は、とても私の誕生日をこれから祝おうとしているよつこは見えなかつたから。

何だか、緊張しているみたい。部屋の中が張り詰めた空氣に覆われている。

「どうしたの？　お父さん。お母さん」

私が呼びかけると、お父さんは私に、お父さんたちの前の席に座るよう促した。私は言われた通りにそこに座る。

「ねえ。今日ね、私……」

誕生日プレゼントにさきのぬごぐるみ貰つたんだよ。そつ、続けようとした。でも、その声をお母さんが遮つた。

「織恵、お母さん達、大事な話があるのよ。ちゃんと聞いてくれるわね」

なんだ、そんな顔をしているの？

お母さんは仕事帰りなのか、スース姿だった。いかにもできるキヤリアウーマンつて感じ。そんなお母さんはかつこにいっていつも思つけど。でも、今はなんだか怖い。

「あんな、織恵。お父さんとお母さん。離婚する事にしたんだ」

私はお母さんから、お父さんに顔を向けた。今、何で言つたの？

「やうなのよ。実は、お母さんとお父さんね、お互に別の人を好きになつてしまつたの」

嘘でしょ？　嘘だよね。そんなの嘘だ。

「実は、やうなんだ。じめんな、織恵。お父さんたち、離婚して互

いの相手と再婚するつもりなんだ。織恵ももつ中学生だし。分かつてくれるよな

分かつてくれる？

そんなの、どうやつて分かれつていうのよ。

「それで、織恵に決めてほしいの。お父さんとお母さん。どうちこついてくる？」

私は制服のスカートをぎゅっと握った。そうしていないと、泣き出してしまってそうだつた。

さつきいつぱい泣いたのに。

「そんなこと、急に言われたつて分かんないよ。どうして？ どうして結婚してるのに、他に好きな人ができるの？」

私の口から出た声は小さくて弱々しく聞えた。

もつと他にいわなきやならない事があるのかも知れないけど、何も思い浮かばない。頭の中が真っ白だ。

あの時みたい。学校で、和君に大嫌いだつて言られたときみたいに、何も考えられない。

「もともと、お見合いで結婚したでしょ。最初から、無理だつたのよね。愛し合つて結婚したわけじゃないから……」

愛し合つて結婚したわけじゃないなら、私はどうして生まれてきたの？

私はいらない子だつたの？

私がいたから、すぐに離婚できなかつたの？

私は一人のお荷物だつたの？

「おい、やめろよ。織恵に言つことじやないだろ」

「何よ。自分ばかり良い顔しなでよ。あなたの方が先に浮気したんじやない

「違う、君の方が……」

二人の言い争いを遮る様に大きな音が鳴つた。私が、大きな音がするほどに、机を両手で叩いたからだ。

掌が痛い。じんじんする。お父さんたちが私を驚いた様に見ていく

る。私は、痛みに構わずに立ち上がった。

「もうやめてよ、私のことは気にせずには好きにすればいいじゃない。
どうせ私が邪魔なくせに」

私はそう叫んで居間を飛び出した。

玄関で靴を履いて慌ててドアの外に出る。

どうして？

なんでこんなことになるんだろう。

ひどいよ。神様。

私が何したって言うの？

どうして、私が好きな人ばかり、私から離れていってしまうの？
ねえ、誰か教えてよ。

お願ひだから。

6

辺りはすっかり暗くなっていた。

夜なのに涼しくなくて、生ぬるい空気が気持ち悪い。

川沿いの道に、今は人の姿は見えない。私は雨川に架かる橋を渡つた。

川原に下りて膝を抱えて座り、散々泣いた。目がひりひりするくらい泣いたのに、まだ涙は出てくる。

どこにも、行くところがない。

家にも帰れないし。どこか遠くに行こうにも、お財布も持つてないし。

なぜか一瞬、頭に和君の顔が浮かんだ。

でも、だめ。嫌いだつて言われたばかりなのに、和君を頼るわけにはいかない。

これからどうしよう。

そう思つて、空を見上げた。夜空には相変わらず星が瞬いていた。晴れてよかつた。天の川がとても綺麗に見える。

今日は七夕。きっと織姫は大好きな彦星に逢つてるんだよね。

私は織姫から名前を貰つたのに、織姫とは全然違う。私を好きになつてくれる人はどこにもいない。彦星の様に私を愛してくれる人は何処にもいないんだ。

でも、それは当たり前のかもしれない。

だつて、私は望まれて生まってきたんじゃないから。愛し合つて生まれてきた子じゃないから、きっと誰も私を好きになつてはくれないんだ。

そう思つたら、また涙が浮かんできた。抱えた膝に涙があたつてはじけた。

「おーい、星野。やつぱりここにいた」

微かな声が私の耳を打つた。

私は顔を上向ける。その声は、近くに架かる橋の上から聞えてきた気がしたからだ。

目を凝らしてみると、橋の上に和君が立つてているのが見えた。何で、ここにいるの？

今日、塾はないはずなのに。

「そこで、待つてろよ。動くなよ」

そう言って、和君が走り出した姿が目にに入った。

何で、そんなこと言うの？

私のこと嫌いって言つたじゃない。

今は和君の顔を見るのが辛い。だから私は、立ち上がりつて走つた。和君が来る方向とは逆に向かつて。

「あ、こら。星野。動くなつて言つただろうが

後ろから、和君の怒鳴り声が聞こえてくる。でも、立ち止まらない。立ち止まる訳がない。

「待てよ。星野」

和君はいつまで私を追つてくるんだろう。放つておいてくれたらいいのに。

走りすぎて、息が切れる。

和君の荒い息も、後ろから聞えてくる。

「待てつってんだろ。……織恵！」

一際大きな声が、私の耳を打つ。

今、私の名前……。

私はつい、立ち止まってしまった。振り向いて、和君が思つた以上に近くにいたことに気づく。

驚いて、また走り出そうとしたら腕を掴まれた。

「つ、捕まえた」

はあはあと荒い息が、和君の口から漏れる。私の腕を掴む手とは反対の手で、膝に手を付いて息を整えている。

私も和君と同じように荒い呼吸を繰り返していた。逃げ出したい。でも、腕をつかまれていて動けない。和君の手をはずして逃げたとしても、どうせすぐに追いつかれちゃう。どうしよう。どうしていいか分からぬ。

「お、おまえ何やつてんだよ。おじさんとおばさん、すっげー心配しておまえのこと捜しまわってるだ」

「嘘……」

そんな訳ないじゃない。お父さんとお母さんが私のこと心配するはずないよ。だって、お父さんとお母さんは私のことなんてどうでもいいって思つてるんだから。邪魔なんだから。

「嘘じゃねえよ。家に来ただぜ。おじさんとおばさん。おまえが家飛び出して帰つてこねえって。俺ん家に来てねえかつてさ」

私は無言で和君を見詰めた。和君はいつもより少し怒ったような顔をして、私を見返した。

「ほら、帰るぞ」

そう言つて私の腕を引っ張ろうとする。でも私は動かなかつた。抵抗するように腕を引く。

和君がたらりを踏むような格好になつた。

「何やつてんだよ」

今度は本当に怒つたような声を上げた。

「一人で帰つてよ。私は帰る家なんてないんだから」

「はあ？ 意味分かんねえし。わがまま言つてんじゃねえよ」

そう言つて、また私の腕を引っ張ろうとするから、私は足を踏ん張つてその場から動こうとしなかった。

「もう、何だよ」

和君の焦れたような声。私はその声に被せるようにならひ。

「それはこっちのセリフだよ。何でよ。私のこと嫌いなんでしょう。」

「だったら、私がどこで何してようが和君には関係ないじゃない」

和君は一瞬だけ、怯んだような顔をした。けど、すぐにまたいつ

もの仮面面にもどつて私に言った。

「おじさんたちに頼まれてんの。俺はおまえを連れて帰んなきゃなんねえんだよ」

「そんなんの知らないよ。そんなんの和君の勝手じゃない。……帰つたつて一緒だよ。どうせ、お父さんとお母さんは離婚しちゃうんだもん。他に家族つくっちゃうんだもん」

怒鳴るように言つと、和君は目を見開いた。一度大きく口を開いたけど言葉が出てこなかつたのか、また閉じて、もう一度口を開けた。

「離婚つて、他に家族つてどうこいつことだよ。おまえの親、離婚すんの？」

その言葉が胸に突き刺さつた。これが現実だつた。両親の離婚。それは、まだ私の中で半分夢の中の出来事みたいだつた。和君の口からその言葉ができると、それが真実なんだつて、思い知られる。走つたおかげでひとつこんでいた涙が、またあふれそうになる。私は和君の目を見て口を開いた。

「ねえ、和君。私、分かつたんだ。私ね、愛されて生まれてきたんじゃないなかつたんだよ。だから、織姫みたいに愛してもらつ事ができないの。織姫から名前もらったのに、だめなんだよ。和君に嫌われるのも当然だつたんだよ」

手を握り締めて、私はそう叫んでいた。視線は地面へ落とす。涙

が零となつて地面に落ちた。

「私は生まれて生まられてきたんじゃないんだよ。だから、誰からも好きになつてもられないの。好きになつてもらえる訳がなかつたんだよ。だから、もういいよ。私のこと嫌いなんでしょう？」お父さんたちと一緒に、和君も、私のこと嫌いなんでしょう？ だったら

……

もう、私に構わないで。

そう言おうとしたけど、声にならなかつた。口から嗚咽がもれ始めて、自分ではどうしようもなくなる。

何度も何度も、あふれる涙を拭つていたとき、私の前に立つていた和君が溜息をついた。

呆れてるのかな。それとも、怒ってるのかな。

和君が動く気配がする。家に帰っちゃうのかな。

そう思つたとき、下を向いていた私の目に、和君の青いスニーカーが映つた。

顔を上げる前に、涙を拭つっていた手を掴まれた。

驚いて今度こそ本当に顔を上げた私の目に、和君の妙に真剣な表情が映つた。それも、とても近くに。

「泣くなよ、もう泣くな」

和君の手が、私の手首を痛いくらい掴んでくる。私は動けずに、和君の顔を凝視する。

すると、和君は一度照れたように、顔を背けて、しばらく何かに耐えるように目を瞑ると、また私の方へ顔を向けた。

「誰からも好かれないなんて、思い込んでんじゃねえよ。バカ。放課後のこと気にしてんなよ。俺も悪かつたけど、あんなの……ただの照れ隠しじゃん。分かれよ」

照れ隠し？ 何言つてんだろう和君は。

そんな嘘つかなくもいいのに。嫌いな私のために。

女の子が泣いてるから、そんな風に言ってくれるのかな。和君は何だかんだ言いながら、いつも女の子には優しいから。

「嘘、つかなくてもいいよ。和君。私、分かつてゐるから。氣を使わなくていいよ」

そう言つと、和君は掴んでいた私の手首を乱暴に離した。すこし、手首がじんじんする。それだけ、力を込めて和君は私の手首を握っていたんだ。

そう思つた瞬間。

ぱんっ。と、大きな音が私の耳の近くで鳴つた。
じんわりと、両頬に痛みが広がる。和君が私の頬を、両手で音が鳴るほど強く挟んだんだ。

「分つかんねえ奴だな。俺は、おまえが好きだつつてんの。他の誰があまえを嫌いだつて言おうが、俺はおまえが好きだ」
和君の顔が近い。和君の掌に包まれた頬が熱い。

「うそ、うそうそ。嘘だあ」

「嘘じやねえよ。おまえが望むなら、彦星にでも何でもなつてやるよ。わらじを千編めつづくなら、やつてやるよ。やつてやろうつて氣になるくらいおまえが好きだよ」

叫ぶように言われた和君の言葉が、胸に響いた。

和君、七夕天女のお話、憶えてたんだ。

小さい頃、私がいつも持ち歩いてた絵本。

ふと、幼稚園の頃の事が頭を過ぎつた。

幼稚園の時、和君が言つたあの一言。

『大きくなつたら、ボクが彦星になつて、織恵ちゃんをお嫁さんにしてあげる』

彦星になつちゃつたら、一年に一回しか逢えないんだよつて、言つたら和君は、

『なら、ボクはボクのまで織恵ちゃんと結婚する。そしたらさうつつと一緒にいられるでしょ』

そう言つてくれた時の和君と、今の和君が重なつた。

あの時同じくらいだった背丈は、今はもう和君の方が少し高いけど。

ねえ、信じていいの？

信じてしまつてもいいの？

本当に私を好きでいてくれる？

「ねえ。本当に私のこと好き？」

そう問うと、和君は私の頬から手を離して、そっぽを向いた。

「何度も言わせんな、バカ」

私の涙腺は壊れちゃつたのかもしれない。

もう、これ以上は出ないだろうつてくらい泣いたのに、また涙が溢れてきちゃうんだから。

私は和君に抱きついた。

「うへえ」

和君が奇妙な声を出したけど気にしない。私は和君の肩に顔を寄せて、泣いた。

和君は、最初あたふたして辺りを見回していたみたいだけど、最後は私の背に手を回してくれた。

7

和君の服の、肩の部分をぐつしょり濡らしたあと、私はようやく泣きやんだ。和君にもう一度最初から私が逃げ出した理由を説明して、私は和君とともに、一度家に戻ることに決めた。

雨川に架かる橋の上を歩いていた時、ふと前を歩く和君が足を止めた。

どうしたのかと思つて、私も足を止めて和君を見ると、和君は私に向かつて、無造作に右手を差し出した。

「んつ」

「何？」

和君は左の頬を人差し指で描きながら、そっぽを向いてしまう。

「手え、つなぐんだろ」

和君の頬は夜目にも分かるくらい赤くなっていた。照れてるんだ。
そう思うと何だか私も照れくさい。

両親が離婚する。そんな最悪な事態は変わっていないのに。私のことを好きでいてくれる人が近くにいると思つと心強い。さつきまでのどん底の気分がまるで嘘のように。

私は和君の差し出してくれた手をそつと握った。
すると、和君はぎゅっと私の手を握り返してくれる。
ゆっくりと、夜道を家に向かつて歩く。

和君がいれば大丈夫。

きつと、大丈夫。

私は帰つたらお父さんとお母さんに聞こうと思つてる事がある。
ねえ、私のこと好き？ 愛してる？ つて。

どんな答えが返つてこようとも、私はもう大丈夫。きつと前を向いて歩いていける。和君がいるから。

「えへへ」

私の口から笑い声が漏れた。和君が好きだつて言つてくれたことが何だか嬉しくて、くすぐつたくて。

「何で笑つてんだよ。気持ち悪いな。」

「だつて、嬉しいんだもん」

その答えに一度振り向きかけた和君だつたけど、結局和君は私を振り返らなかつた。

前を歩く和君の背に私は言った。

「私も、和君大好きだよ」

小さな声だつたけど、多分和君には聞こえたと思う。
私たち以外に人の通つてない、橋の上。満天の星空の下で。私の手を握る、和君の手の力が強くなつたから。

今日は七夕。

今年はちゃんと、笹を買って、笹飾りを作った。

短冊には、まだ願いを書いていない。一緒に書こうと約束している人がいるから。

両親の離婚騒ぎから、もう一年が経った。
あの日。和君に連れられて、家に帰った私は、両親に思いをぶつけた。

ねえ、私のこと好き?

愛してる?

そう聞いた私に、両親は何の迷いもなく。

『当たり前だらう。織恵は、お父さんとお母さんにとって、一番の宝物だ』

そう言つてくれた。

その言葉だけでじゅうぶんだった。

お父さんとお母さん。どちらか一人を選べなかつた私は、雨川を挟んだ川向こうに住む父方の祖父母と暮らす事にした。学区が違つて、学校は転校しなきやならなかつたけど。和君と離れ離れになるのは寂しかつたけど。でも、そつすることを選んだ。

今は、とつても幸せ。

私には、妹と弟ができた。お父さんの所には男の子。お母さんの所には女の子が生まれた。

たまに、小さな弟と妹に会いにいつてゐる。

でも、今日は……。

「織恵」

橋の袂で待つていた私は顔を上げた。去年より十センチ近く身長の伸びた和君は、以前に増してかつこよくなつた。私は橋の真ん中辺りで、手を振つてる和君に手を振り返す。

「和君」

走つて私のところに来た和君は、何も言わずに、私の手をとる。

並んで歩く時、私達はいつも手をつなぐ。

少しの照れはあるけれど、こつやつと一緒に歩いていく。

年に一回しか逢えない、織姫と彦星が羨ましがるくらい。

(後書き)

久々の投稿になりました今作は、針井さま主催の『七夕企画星に願いを』に参加させていただいたものです。今回は苦手なことにチャレンジした作品もあります。お楽しみいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5635e/>

織り姫になりたい

2010年10月8日14時48分発行